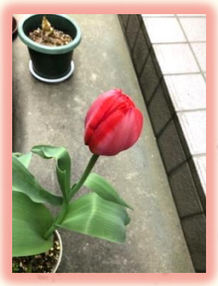
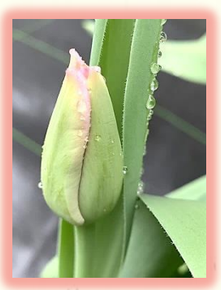
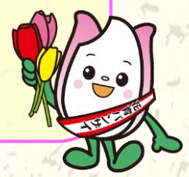
花育News

【秋に植えた球根はどうなった？】 ??





昨年10月，秋の花育の日「チューリップの球根植え体験」にご参加いただいた皆さまからチューリップが咲いた様子と「自分で植えたので成長が気になった」「自分で植えると咲いた時の嬉しさ倍増でした」「日々観察してしまう」など感想も一緒に寄せられました。
育てる楽しさを感じていただけてうれしいです。
お便りありがとうございました。



【チューリップの花を再利用～にいがた花絵プロジェクト～】

にいがた花絵プロジェクト実行委員会では球根を育てるために廃棄される花部分を再利用し，ボランティアのみなさんと花摘みから行い,大きな花絵を制作しています。
今年のデザイン画のタイトルは「みんなでおにぎり」。中原市長も花絵作りに初参加し,おにぎりが食べたくなっちゃうくらいカワイイ花絵とG20(新潟農業大臣会合)開催にあわせ世界地図の花絵が完成しました。

＜発行・問合せ＞　新潟市農林水産部　食と花の推進課　食育・花育担当
〒951-8550 新潟市中央区学校町通１番町６０２番地１　Tel：025-226-1792　　Fax :025-230-0423
E-mail：shokuhana@city.niigata.lg.jp
【花育通信 Vol.33　2019年7月発行】

にいがた

花育通信 Vol.33

＜夏の特大号＞

- Contents -

◎新年号「令和」
◎花育コラム～緑について考えよう～
◎地域の花育活動紹介～小須戸小学校～
◎花育News

初春の令月にして
氣淑く風和ぎ
梅は鏡前の粉を披き
蘭は珮後の香を薫す

～ 万葉集「梅花の歌三十二首の序文」～

ウメ【梅】・・・バラ科サクラ属　日当たりが良く、水はけのよい肥沃な土壌を好む

清楚な花がいち早く春の香りを運んでくれる、親しみやすく馴染みのある花木で、新潟など冬が長い地域にとってはウメの花が咲くと、冬の終わりが近いと感じることができ、さらに梅干しや梅酒など昔から日本人の生活には欠かせない花木です。
ウメは主に花を観賞する**花ウメ**と実をとるための**実ウメ**に大別されます。

実ウメの生産地といえば新潟市江南区、その中でも有名なのは
「藤五郎梅」、肉質がねっとりしていて梅干しはもちろんですが梅酒や梅ジュースなどなんでも使える人気の品種です。
「越の梅」、種が小さくやや小粒ですが、肉厚で柔らかくシソの着色がよく、色がキレイな梅干しになります。

新年号「令和」の元となった万葉集にあるように、日本人は昔から花を愛でる文化をもち、大切にしてきました。四季折々の花やみどりに触れながら心豊かに暮らす、そのような文化は新しい時代になっても守り続けていきたいものです。

【地域の花育活動紹介】　～小須戸小学校　ボケを育てる～

新潟市秋葉区にある小須戸小学校では４年生から６年生まで全員が地元特産のボケを育てています。
この取組は１０年以上続いており，地元日本ボケ協会の協力のもと行われています。
４年生になると１人１鉢のボケを持ち，卒業までの間，毎日の水やり，年２回の剪定を自分で行います。
そして３月，６年生は３年間育てたボケと一緒に卒業式を迎え自宅に持ち帰ります。

秋葉区小須戸地区は古くからボケの生産・改良部門で全国的に有名であり「日本ボケ協会」の発祥の地でもあります。その地元特産のボケを子どもたちが育てる中で，地元を知る，地域の方との交流，友達と協力しあうなど，多くのことを学べる機会になっており，
「３年間，ボケを育てる」＝「花を通じて心を育む」を長年実践している活動です。

ボケ（バラ科）・・・まだ寒い冬の頃からポツポツと花が咲きはじめ

春になるとたくさんの花をつけるきれいな花木です。
秋葉区にある「うららこすど」では
毎年３月に日本一の規模で「日本ボケ展」が
開催されています。

ここからスタート４年生

植え方についてしっかり習います

初めての４年生からは楽しかったぁ,の声がたくさん聞こえていました！

毎日の水やりがんばって！

さすが先輩５・６年生

剪定についてポイントを習います
「伸びた枝の下１cm 残して切りましょう」

太い枝と剪定鋏（はさみ）に奮闘中

６年生になると剪定も
自分で判断しながら
手際よくカット✂

剪定前

剪定後

花育コラム

「緑（みどり）」について考えよう

新潟市花育マスター　土沼　直亮

樹木や草花など植物の総称として「緑（みどり）」と呼ぶ。緑と聞くと、管理が大変で厄介なものと考える方もいるだろう。一方で、お花や庭木の世話、野菜づくりなどが好きで、敷地一杯に緑を取り込んで生活している方もいる。ここでは改めて緑が私たちにとってどのような意味をもっているのか考えてみたい。

◆　緑は「生命と成長」の象徴

日本において 701 年に制定された大宝律令には、３歳以下の子供を「緑」と呼ぶ規定があった。赤ちゃんを嬰子(みどりご)と呼ぶのも、新しく誕生した「生命」が、新芽や若葉にように「生命力」に溢れているからなのだろう。造園家・進士五十八氏によると、グリーン(green)の語源であるアーリアン語のガーラ(ghra)には、「生長する」という意味があるという(「ｱﾒﾆﾃｨ･ﾃﾞｻﾞｲﾝ」より)。緑は日本でも西洋でも「生命」や「生長」といった意味を持っているのがわかる。私自身も３歳の娘(大宝律令でいうところの緑)がいるが、手に負えない程の「生命力」に溢れながらも、まさに日々「成長」しており、その姿を見るのが家族の大きな楽しみとなっている。

新潟市　花育の日

◆　アタカマ砂漠で見た緑

以前南米・チリにあるアタカマ砂漠を訪れたことがある。アタカマ砂漠は年平均降水量が 10mm 程度しかなく、世界で最も乾燥した砂漠と言われている。これだけ生き物の生存にとって過酷な環境でありながらも、アタカマのオアシスに人間の営みがあることを知り、驚きと感動を覚えた。私たちの住む日本は四方を海に囲まれ、年間降水量も 1500mm 以上、さらに国土の 67%が森林に覆われている。日本に居る時は当たり前のように感じていた緑の存在も、過酷なアタカマのオアシスでは、強烈な存在感を持っていた。端的に「人間は、水と緑なしでは生きることが出来ない」ということに気づかされた瞬間であった。地理学者・J・アップルトンは「人は、樹木をみると、その付近に水があることを無意識に意識し、そこに生命を維持できる空間があることを認識する」と述べている（「風景の経験」より）。私たちが緑を求めるのは、生物としての人間が、より本能的に生存に適した環境を無意識に選択しているからなのかもしれない。

◆　人間社会とは無関係な世界

私たちにとってより身近な緑は他にどんな意味をもつのだろうか。養老孟司氏は、「人間の意思とは無関係に広がっている花鳥風月の世界の存在を意識すること」の大切さを述べている（「庭は手入れをするもんだ」より）。都市化が進み、身の回りの多くが機械化、人工化する中で、私たちの生活は効率的、合理的になり、便利な反面、ストレスの多い社会を生み出してもいる。一方で緑は、私たちの意識とは無関係に存在し、日々動いている。人間社会とは別の世界を日常のどこかで意識することで、多少なりともストレスから解き放たれ、心を開放することができるのではないだろうか。ニューヨークのマンハッタンに広大なセントラル・パークを設計した造園家のオルムステッドも「緑の自然が人々の健康や体力を回復させる性質を持っていることを強く信じた」という。事実、セントラル・パークがニューヨーカーにとっての「憩いの場」になっていることを私自身も訪れて見聞きした。人工的な空間に、緑という自然を持つことは、単に「ものとしての緑」、「装飾としての緑」以上の意味を持つのである。

◆　緑を育てる意味

私は花育の本質を、単に花を育てることではなく、「花を育てる心を育むことである」と理解している。それは、私自身が緑を育てながら、いつも緑に他者への労りの心を育ててもらっていると感じているからである。園芸家のチャールズ・A・ルイスも「植物が生長する時、人はその美しい植物よりも、もっと美しい人として成長している」と述べている（「植物と人間の絆」より）。日々の生活や仕事に囚われながらも、緑の世話をする時間と心のゆとりを持つことが、子供たちの人間形成にも、私たち大人にも良い効用をもたらしてくれると信じている。

プロフィール
土沼　直亮（どぬま なおあき）　株式会社 要松園コーポレーション専務取締役・造園家
1 級造園技能士・1 級造園施工管理技士・NHK カルチャー新潟教室講師「新潟の名園めぐり」・
にいがた庭園文化交流協会理事
代表的な展示・作品にスウェーデン・ウプサラ大学リンネ植物園での作庭展示（2014）、デンマーク・フレソ市ファラム文化センター庭園築造（2016）などがある